

# 建築の「オブジェクト」をめぐって

平野 利樹

東京大学 隈研究室 博士課程

Web : <http://toshiki-hirano.com> Mail : [info@toshiki-hirano.com](mailto:info@toshiki-hirano.com)

## 01. オブジェクト指向存在論

### a. 背景

#### a-01. 思弁的实在論 (Speculative Realism)

- ・ 2007年4月にロンドン大学のゴールドスミス・カレッジで開催された同名のワークショップが起源
- ・ グレアム・ハーマン (Graham Harman)、レイ・ブラシエ (Ray Brassier)、カンタン・メイヤスー (Quentin Meillassoux)、イアン・ハミルトン・グラント (Ian Hamilton Grant) が中心メンバー
- ・ それぞれの思想的立場は、異なり、対立もあるが、「相関主義 (Correlationism)」に対して批判的である点で共通
- ・ ハーマンのオブジェクト指向存在論も大まかに思弁的实在論の中の一つの思想とされる

#### a-02. 相関主義 (Correlationism)

相関主義とは、主観性と客観性の領域をそれぞれ独立したものとして考える主張を無効にするものである。私たちは主体との関係から分離された対象「それ自体」を把握することは決してできないと言うのみならず、主体はつねにすでに対象との関係に置かれているのであって、そうでない主体を把握することは決してできないということも主張する。

(メイヤスー, カンタン, 千葉雅也 (訳), 大橋完太郎 (訳), 星野太 (訳) 『有限性の後で 偶然性の必然性についての試論』人文書院, 2016年, p.16.)

相関主義者は、世界なしに人間は存在しない、そして、人間なしに世界は存在せず、両者の間の基本的な相関関係か共感関係しか存在していないと考えている。つまり、相関主義者にとって、オブジェクトとは自律したものではないのである。より率直に言うならば、オブジェクトは存在していないのだ。

(Harman, Graham (2010) Towards Speculative Realism, Zero Books, p.199. (筆者翻訳))

- ・ 人間が物を認識するとき、それは人間に対する現象を認識しているのであって、「物自体」は認識不可能なものであるというカントの思想が起源
- ・ 人間と物との関係性の問題のみを扱う思想

### b. オブジェクト指向存在論 (Object Oriented Ontology)

ダイヤモンド、縄、中性子に加え、軍隊、怪物、丸四角、そして実在または架空の国家などもオブジェクトに含まれる。このようなすべてのオブジェクトは、存在論によって説明されなければならないものであり、低俗で無価値なものとして片付けられるべきではないのである。

(Harman, Graham (2011), The Quadruple Object, Zero Books, p.5. (筆者翻訳))

- ・ グレアム・ハーマン (Graham Harman) を中心に発展
- ・ オブジェクトそのものについて思考することを主張
- ・ オブジェクトの存在を蔑ろにしてきたこれまでの哲学の考え方を大きく二つ (「Undermining」「Overmining」) に分類

#### b-01. Undermining (下方解体)

- ・ オブジェクトとは表層的なものであり、何らかのより基本的な要素によって構成されているという考え方
- ・ 一見自律的に見えるオブジェクトは、実際のところ、より小さな部分 (粒子、原子...etc) の寄せ集めである
- ・ 例えば馬を構成する粒子を全て列記したとして、それは馬そのものを記述できない (ハーマンによる批判)

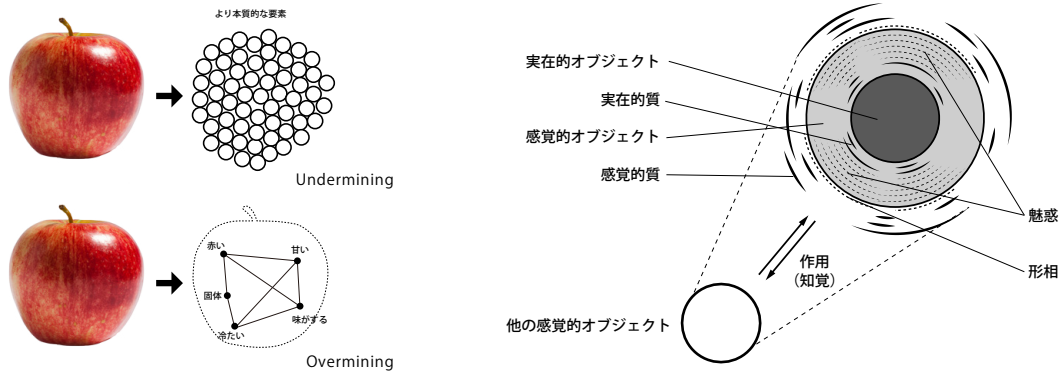
#### b-02. Overmining (上方解体)

- ・ オブジェクトとは精神内でしか存在せず、さまざまな質とそれら同士の関係性が本質的という考え方 (関係性主義)
- ・ リンゴというオブジェクトは「赤い」「甘い」「冷たい」「硬い」「固体である」「味がする」などの個別の質の関係性の表象でしかなく、そのような関係性こそがオブジェクトそのものよりも本質的である
- ・ ハーマンはブルーノ・ラトゥールを「Overmining」の代表として挙げている
- ・ 世界が全て関係性に還元されるのであれば、世界の様態 (関係性の総和) は変化できない (ハーマンによる批判)

### b-03. オブジェクト指向存在論におけるオブジェクト

1. 様々なスケールを持つ個別の存在（クオークや電子だけではなくて）は、宇宙においてそれ自身が究極的な存在である。
2. これらの存在は、これらが持つ関係性や、持ちうるすべての関係性の和によって還元されることはない。オブジェクトは関係性から後退している。（Harman, Graham (2010), "Brief SR/OOO Tutorial" Bells and Whistles: More Speculative Realism, Zero Books, p.7.（筆者翻訳））

- すべてのオブジェクト（実在的オブジェクト（real object））は他のオブジェクトとの関係からは引きこもっていて、直接的にはアクセスできない
- 「感覚的オブジェクト（sensual object）」と、その表層を渦巻く「感覚的質（sensual quality）」を通して、他のオブジェクトに作用、そして他のオブジェクトが知覚することができる



### b-04. 多様な知覚の許容

もしハンマーを見つめてもハンマーに秘められた様々な秘密が感知できないとすれば、われわれがハンマーを使うときも同じことが言える。犬やコウモリ、さらには虫が知覚しているかもしれない、ハンマーが持つ、人間が知覚できる範囲を越えた多様な質を考えてみるとよい。ハンマーの中で周辺での紫外線や電磁場への影響は、人間の理論と同じく人間の実践にとってもアクセスできないものである。つまり、事物には、理論と実践から隠された背景が存在しているのだ。

（Harman, Graham (2013) Bells and Whistles: More Speculative Realism, Zero Books, p.107.（筆者翻訳））

オブジェクトの実在は人間から隠れているだけではなく、他のオブジェクトからも同様に隠れているのである。ハンマーの実在がすべてのアクセスよりもさらに深いところにあるのは、単に人間やその他の賢い動物（イルカや猿、犬やカラスなど）が持つ、特異な心理学的なり神経学的な性質によるからではない。人間や動物がオブジェクトを汲み尽くせないのと同様に、生命のないオブジェクトも、互いにその実在を汲み尽くせないのである。

（同上。（筆者翻訳））

- ハンマーは人間にとっては釘を打ちつけることができるという質をもったオブジェクトであるが、それ以外にも様々な質を持っており、さらには人間には知ることのできないものさえ秘められている
- オブジェクトはその本質が汲み尽くせないものであり、また関係性の総体に還元できないという点から、まったく予期しない質を秘めている可能性がある

### b-05. 人間中心主義批判

この転回（カントによるコペルニクス的転回）について受け入れがたいのは、人間と世界という単一の関係性への固定である。つまり、この関係性が、他の関係性 - 雨と木、海と砂浜、カモメと森、または宇宙線と月との関係性よりも測り難いほど重要なものとして、中心的に位置付けされていることである。

（Harman, Graham (2013) Bells and Whistles: More Speculative Realism, Zero Books, p.108.（筆者翻訳））

- これまでの哲学においては、人間と他のオブジェクトとの関係性のみが取り扱われており、これによって、人間＝主体として、その存在を他のオブジェクトよりも上位に位置付けていたと指摘（人間中心主義的）
- ハーマンの思想において、人間と他のオブジェクトとの関係性も、オブジェクト同士の関係性と同等であるとされる
- 「人工 / 自然」という区別を批判するラトゥールの思想と共鳴

## 02. 建築とオブジェクト指向存在論

### a. 概要

- ・2012年に発表されたデイヴィッド・ルイ (David Ruy) の論考「(奇妙で不可解な) オブジェクトへの回帰」から発展
- ・ペーパーレス・スタジオの建築家たちの言説に対する批判的発展を図る
- ・「接続」の時代から「切断」の時代への変化に対する応答
- ・ザハ事務所のパトリック・シューマツハ (Patrik Schumacher) の唱える「パラメトリズム (Parametricism)」と対立
- ・社会性偏重への批判 (MoMA「Small Scale, Big Change」展、プリツカー賞、2016年ヴェネツィア・ビエンナーレ…etc)

### b. ペーパーレス・スタジオ

- ・1994年にコロンビア大学建築学部で設立され、世界でもいち早くデジタル・テクノロジーを建築教育に導入した建築設計スタジオの総称
- ・グレッグ・リン (Greg Lynn)、スタン・アレン (Stan Allen)、ハニ・ラシッド (Hani Rashid)、ジェシー・ライザー (Jesse Reiser) + 梅本奈々子が中心的メンバー
- ・1990年代における、グローバリズムによってあらゆるものの境界が消失し、流動的に接続される世界像 (ベルリンの壁崩壊やEUの発足…etc) と、ドゥルーズの哲学 (生成変化、平滑空間、襞、リゾーム…etc) の「接続の思想」としての解釈からの影響
- ・複数のパラメーターの関係性によって生成される建築のあり方 (リン)
- ・都市というフィールドの中の粒子としての建築のあり方 (アレン)
- ・物質の流動によって生成される建築のあり方 (ライザー + 梅本)
- ・フォルディング・アーキテクチャの基礎 (横浜大さん橋)
- ・コンピューショナル・デザインとして発展 (AADRL、シュツットガルト工科大、東大小淵研…etc)

### c. パラメトリズム (Parametricism)

存在意義を持ち生産的であるためには、我々はネットワークに繋がり、自身の力を他の人がしていることに合わせて調整する必要がある。すべてのものは、他のすべてのものとコミュニケーションが取られる必要がある。都市環境に関してこれが示唆しているのは、我々はその中での出来事を可能な限り多く目撃、参加することができ、自らの次の行動についての複数の選択肢が常に提示されていることである。視覚のフィールドが豊かで秩序や多様な情報をもった光景を持ち、さらにその可視レイヤーの背後に内在しているものについて示唆していることで、このような都市環境が達成される。これには接続が決定的な要素となる。パラメトリズムはそのような超接続性を可能にする環境をデザインすることを可能にする。(Schumacher, Patrik (2011) The Autopoiesis of Architecture: A New Framework for Architecture, Wiley, p.707. (筆者翻訳))

- ・ザハ事務所のパトリック・シューマツハ (Patrik Schumacher) が提唱
- ・ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想や設計手法を一つのスタイルとしてまとめ上げることを図る
- ・多様な要素がそれぞれ個別に自律するのではなく、平等なヒエラルキーのない存在としてネットワークの中で等価に接続され、共存しているような社会像
- ・ネットワークを物質化したものとして、建築・都市が位置付けられる

### d. アレハンドロ・ザエラ・ポロ (Alejandro Zaera-Polo)

#### d-01. 横浜大さん橋 (1990年代)

フォルドによって、柱・壁・床といった独立した構造は回避され、従来の建築において外皮と構造が物質的に分離されていたのを曖昧にすることができるようになる。そして、構造荷重の差異は異なる部材によってではなく、単一の物質の連続体における特異点として現れる。

(Zaera-Polo, Alejandro (2013) "Forget Heisenberg" Anybody, New York: Any corporation, p.208. (筆者翻訳))

さん橋をゲートとしてではなくインターフェースとして捉えることによって、境界を顕在化するのではなく、二つの状態の間に緩やかな移行が生み出された。

(前掲論文、p.207. (筆者翻訳))

- ・グローバリズムにおける境界のない世界像に対応した建築のあり方の追求
- ・建築を構成する要素が一つの連続体として扱われる
- ・都市における人の流動を取り込むような建築のあり方

## d-02. 境界の重要性の主張（2000年代以降）

数十年間続いたグローバリゼーションの後、境界のない世界や、自由に循環・流動できる空間性をもったユートピアという幻想が、空間的・物質的な実践の目指すところではもはや無くなってしまった段階に移行しようとしている。つまり、我々は、住んでいるこの空間が境界無しに成立しているわけではないという事実を認識しなければならないのだ。

(Zaera-Polo, Alejandro (2010) "Ecotectonics" Zaera-Polo, The Sniper's Log: Architectural Chronicles of Generation X, Actar, p.258. (筆者翻訳))

恐らく建築のエンヴェロープは、建築を構成する要素の中で最も古く原始的なものである。エンヴェロープは、外部と内部、自然と人工の分割を物質化する。プライベートとパブリックや土地の所有権を区別する。また、ファサードとしては、エンヴェロープは、環境的・領域的役割に加え、表象の装置としても機能する。建築のエンヴェロープは境界、辺境であり、接合部である。つまり、政治的な意味合いに満たされているのだ。

(Zaera-Polo, Alejandro (2009) "The Politics of the Envelope" Zaera-Polo, Alejandro (2013) The Sniper's Log: Architectural Chronicles of Generation X, Actar, pp.479-480. (筆者翻訳))

- ・すべての要素がヒエラルキーなく、そして境界を隔てずに接続する 1990年代のグローバリズムにおける世界像に疑義
- ・2001年アメリカ同時多発テロ以降について、異なる要素が境界を隔てて接しているような世界像を提示
- ・建築における境界の問題として、エンヴェロープ（外皮）の重要性を主張（「The Politics of the Envelope」）
- ・物質性から表象性への関心の移行を予測

## e. デイヴィッド・ルイ（David Ruy）「(奇妙で不可解な) オブジェクトへの回帰」

今の建築家たちは、建築とは社会や文化的環境の副産物であるという考えに囚われている。そこでは、建築とは科学主義的なシステムとネットワークの一部、もしくは、環境内（それが現実の環境であれ、コンピュータ内に再現された仮想的なものであれ）のパラメーターが与える一時的な計算結果でしかないと思われている。おもに形態や美に対して関心を持っている建築家ですら、仮想的な外部環境と建築オブジェクトとの関係性において、オブジェクトの存在意義となる生成のための外的なパラメーターや条件を見出そうとする奇妙な傾向がある。[中略]

今日では、コンテキストというものがどのように定義されているかが、そこから導き出されたものとして建築を考えることは極めて自然なことと思われる。外的な力（場合によっては計測可能、仮想的なもの、ないしは建築家による全くの空想的なイメージとしてのもの）をコーディネートすることが、現代における建築の実践における関心の中心にあると理解されている。[中略]

グローバルネットワークの詳細に関心が払われるようになるとともに、建築のオブジェクトの重要性の低下によって、建築が持っていた魔力は取り除かれてしまった。

(Ruy, David (2012), "Returning to (Strange) Objects" tarp – Architectural Manual, Pratt Institute, pp.38. (筆者翻訳))

- ・2012年に発表された、建築から初めてオブジェクト指向存在論について言及された論考
- ・ルイは、ハーマンと学部時代に同級生であるとともに、ペーパーレス・スタジオの初期の学生であり、ライザーと梅本の事務所で勤務していた
- ・オブジェクト指向存在論における「Overmining」「Undermining」批判を援用し、ペーパーレス・スタジオ以降の建築において、オブジェクトを軽視していると批判
- ・オブジェクトとしての建築のあり方の可能性の模索を提案

## f. オブジェクト指向存在論の建築への応用の試み（アメリカにおける新たな潮流）

- ・コンピューテーショナル・デザインにおける合理性の追求へのアンチテーゼ
- ・デジタル・テクノロジーの意図的誤用（MOS Architects）
- ・ポスト・デジタルの流れと同調

### f-01. 新コラージュ主義

- ・マーク・フォスター・ゲージ（Mark Foster Gage）、アンドリュー・コバック（Andrew Kovacs）、ヒメネス・ライ（Jimenez Lai）…etc
- ・ポスト・モダニズムにおけるコラージュ手法の再考
- ・インターネット上の膨大な量のデータや、3Dモデリング（Zbrush…etc）の活用

### f-02. 新たなアニミズム

- ・ヤング & アヤタ（Young & Ayata）、LADG、EADO…etc
- ・ドゥルーズの生命論からの発展？（合理性の追求としての生物の参照から、表象性の追求としての参照への移行？）

## 参考文献

### オブジェクト指向存在論（日本語）

- ・ハーマン, グレアム、岡本源太（訳）「代替因果について」『現代思想』(Vol.42-1)、青土社、2014年、pp.96-115。
- ・ハーマン, グレアム、上妻世海（訳）「Art Without Relations」URL=https://note.mu/skkzm01/n/na8f7ff8e60a3（公開：2016年5月29日、閲覧：2016年7月10日）
- ・ハーマン, グレアム、上妻世海（訳）「The Road to Objects」URL=https://note.mu/skkzm01/n/nfb88f43475bd（公開：2016年6月5日、閲覧：2016年7月10日）
- ・ハーマン, グレアム、上妻世海（訳）「第一哲学としての美学：レヴィナスと非人間」URL=https://note.mu/skkzm01/n/nea42da20f603（公開：2016年7月8日、閲覧：2016年7月10日）
- ・星野太「第一哲学としての美学 グレアム・ハーマンの存在論」『現代思想』(Vol.43-1)、青土社、2015年、pp.130-142。

### 建築におけるオブジェクト指向存在論（日本語）

- ・ルイ, デイヴィット、平野利樹（訳）「(奇妙で不可解な) オブジェクトへの回帰」2015年（未公開）
- ・瀧本雅志「新しい哲学と「オブジェクト a」」(10+1 web site) URL=http://10plus1.jp/monthly/2015/02/issue-05.php（公開：2015年2月、閲覧：2015年7月29日）
- ・磯崎新、日笠直彦「建築のマテリアリズム」『現代思想』(Vol.43-2)、青土社、2015年、pp.104-121。

### 建築におけるオブジェクト指向存在論（英語）

- ・Ruy, David (2012) "Returning to (Strange) Objects" tarp – Architectural Manual, Pratt Institute, pp.38-42.
- ・Payne, Jason (2013) "Variations on the Disco Ball, or, The Ambivalent Object" PROJECT, Issue2, Consolidated Urbanism Inc., pp.20-27.
- ・Gannon, Todd, Harman, Graham, Ruy, David, Wiscombe, Tom (2015) "The Object Turn: A Conversation" Log, 33, Any corporation, pp.73-94.
- ・Foster Gage, Mark (2015) "Killing Simplicity: Object-Oriented Philosophy In Architecture" Log, 33, Any corporation, pp.95-106.
- ・Mckim, Joel (2014) "Radical Infrastructure? A New Realism and Materialism in Philosophy and Architecture" Lahiri, Nadir, Radical Philosophy and Architecture: The Missed Encounter, Bloomsbury Publishing, pp.133-150.
- ・Wiscombe, Tom (2014) "Discreteness, or Towards a Flat Ontology of Architecture" PROJECT, Issue3, Consolidated Urbanism Inc., pp.34-43.

### ペーパーレス・スタジオ（日本語）

- ・松畑強「ポスト・デコンのふにゃふにゃ建築・都市」、『SD』1994年09月号、鹿島出版会。
- ・アレン, スタン、坂元伝（訳）「分散、組み合わせ、場 序論」、『A+U』1998年8月号、新建築社、pp.3-11。
- ・ライザー+ウメモト、橋本憲一郎（訳）『アトラス 新しい建築の見取り図』彰国社、2008年。
- ・カルポ, マリオ、美濃部幸郎（訳）『アルファベットそしてアルゴリズム：表記法による建築—ルネサンスからデジタル革命へ』鹿島出版会、2014年。

### ペーパーレス・スタジオ（英語）

- ・Lynn, Greg (1992) "Multiplicitous and Inorganic Bodies" Assemblage No.19, pp.32-49.
- ・Allen, Stan (1997) "From Object to Field" Architectural Design, vol.56 no.5/6, pp.24-31.
- ・Reiser, Jesse, Umemoto, Nanako (1998) Reiser+Umemoto Recent Projects, Academy Editions.
- ・Architectural Design(Folding in Architecture), vol.63 no.3/4 1993.
- ・Architectural Design(Architecture After Geometry), vol.56 no.5/6 1997.
- ・Carpo, Mario (2011), The Alphabet and the Algorithm, The MIT Press.

### パラメトリズム（英語）

- ・Schumacher, Patrik (2011) The Autopoiesis of Architecture: A New Framework for Architecture, Wiley.
- ・Schumacher, Patrik (2012) The Autopoiesis of Architecture, Volume II: A New Agenda for Architecture, Wiley.
- ・Schumacher, Patrik (2013) "I am trying to imagine a radical free-market urbanism" Log, 28, Any corporation, pp.39-52.
- ・Architectural Design(Parametricism 2.0), vol.86 no.2 2016.

# 付録図版

建築における「オブジェクト」の概念をめぐる、モダニズム以降の議論の推移

